

**「ポストフクシマ」、そしてポスト日本？**  
**—知性の悲観主義、意志の楽観主義（アントニオ・グラムシ）<sup>(1)</sup>**  
**“Post-Fukushima” - Japan ?**  
**Pessimism of the Intellect, Optimism of the Will (Gramsci)**

シュテッフィ・リヒター

（福井 朗子，オプヒュルス鹿島ライノルト訳）

私は、この論文で、「ポストフクシマ」、そしてポスト日本、という視点で短い見解を示したいと思う。地震学者の石橋克彦は、1997年から「原発震災」という言葉で今回のような地震による原発事故と震災が複合的に絡み合う災害に警鐘を鳴らしてきた。この大事件は、私に日本を含む後期資本主義社会、もしくはポストモダン社会の構造の変化を把握させるきっかけを与えた。それは、たとえば「原発ジプシー」、 「原発放浪者」と呼ばれる労働者なくしては原子炉を稼働できないなど幾つかの理由から、私たちがこれまで認めてこなかった（もしくは無視し、タブー視した）事実や現象を明らかにするために役立つ、新しい概念や新たな枠組みを把握することも含んでいる。よりわかりやすく言うならば、この考察は（批判的な）知識と実践の関係の再定義を目的としている。

私は、「ポストフクシマ、そしてポスト日本」という前提（＝概念）が、「フクシマの後で日本は変わった、もしくは変化している」という結論を証明するために用いられることによって、悪循環に陥る危険性があるということに十分注意しながら、あえてこの視点で考えてみたいと思う。

たとえば、批評家の東浩紀が、「地震以前、日本

は衰退に怯える臆病な国家だった。しかし、おそらく、日本人はこの大災害の経験を、新たな信頼によって強固に結ばれた社会を建て直すそのきっかけにできるかもしれない」と述べている。この「～の前と後」という種のレトリックは、私の思考研究において重要な分野でもある。「震災前の日本と震災後の日本」に関する声は次のように異なっている。それは、楽観的に「大丈夫、私たちは（復活）できる！」という声から「日本はもうおしまいだ」との悲観的な声、また、押し付けがましい国家主義的な「ガンバレ、日本」という声から、この震災を日本が〈良い共同体〉として新しい体制へと変わる機会と捉え、私たちを奮起させるような励ましの声までさまざまである。

社会学者の宮台真司は、「〈悪い共同体〉は、参加主義でなく権威主義で、知識主義でなく空気主義で、それゆえ〈自立〉的でなく〈依存〉的です。〈良い共同体〉は、権威主義を退けて参加して引き受け、空気主義を退けて知識や科学を基盤とし、それゆえ自明性への〈依存〉という思考停止を退け、共同体保全のための工夫を〈自立〉して展開している」と述べている。

このようなさまざまな声があがるなかで、ここで

は批判的知識人である柄谷行人を取り上げたい。柄谷は、日本において最も有名な思想家の一人というわけではないが、今後、彼を日本研究家として「より広い世界の向こうに」紹介することが、私たちの「仕事」にはなるだろう。ここで重要なのは、柄谷が、その著書『世界共和国へ—資本=ネーション=国家を超えて』（2006）で知られるように、ポロメオの環<sup>(2)</sup>のように結合した「資本-ネーション-国家」にとって代わるため、現実的な野心をもって支配的な考えに対抗しようとしながら、グローバルにもローカルにも考え行動する知識人のひとりである、ということである。言うなれば、柄谷はグラムシのいう「有機的知識人」<sup>(3)</sup>なのである。私はこのことを二つの例をあげて説明したい。まず、第一に、柄谷自身の日本での最近の反原発運動への理論的で実践的な関わりについてである。その関わり方は、前述した（批判的な）知識と実践の新しい関係のひとつの可能性を示している。柄谷は、「社会は変わる、なぜなら、デモをすることで、『人がデモをする社会』に変わるからだ」と主張している。第二に、「素人の乱」（アマチュアたちの反乱）に焦点をあてながら、どのようにこの柄谷の考えが（一種の体現化されたものとして）全く異なる抗議活動を展開する多くの活動家に支持されたのかを考察したい。

まず、柄谷が「素人の乱」に組織された「原発やめろデモ!!!!」に初めて参加した直後に発表した記事を引用したい。柄谷は、災害直後に支配的になるのはホップズ的な自然状態（人が人に対してオオカミとなる状態）ではなく、むしろ相互扶助的な共同体「災害ユートピア」だと主張するレベッカ・ソルニットに部分的に賛同しながら、次のように述べている。

「もっともこれは長くは続きません。……しかし、その時点では今回の震災のことはまったく予想をしていませんでした。実際に起こってみると、……『災害ユートピア』というものとは違うという感じがしました。『災害ユートピア』の面はたしかにあります、ある意味で、ホップズがいったような『自然状態』的な面が同時に出てきています。それは原発事故のせいです。そのために、人びとはつながるよりむしろ切り離された。……ソルニットが『災害ユートピア』で書いたことは妥当しないかという、そんなことはない、と思います。彼女は、国家が介入したとき、災害はホップズ的な状態をもたらすと書いている。それが福島原発事故に起こっていたのです……ある意味で、放射性物質とは国家なのです。『放射能=国家』が人びとを切り離している。さらにいうと、ソルニットはこの本で、自然災害以外の災害（金融破綻など）についても取り上げています。また、そのような災害から政治的革命や社会的改革が生まれたということ。その意味で、私は、この原発災害が日本の社会を変えるきっかけになるのではないかと考えています。そして、その第一歩が、『デモをしよう』ということです。」（柄谷 2011b : 18 - 19)

柄谷は、社会悪を克服する手段のひとつとしての「介入」の可能性に対し懐疑的なことで知られているが、それにもかかわらず抗議のひとつの形として（彼が最近「アセンブリー」「集会」「寄合」と呼んでいるような）デモに希望を託している。ここにもうひとつ短い引用がある。

「原発に反対すべき理由は、今度の事故で新たに発見されたのではない。それは1950年代においてははっきりしていたのです。しかし、それなら、なぜ原発建設を放置してしまったのか。特に強制があったわけでもないのに、原発に反対することができなくなるような状態があったのです。デモについても、同じことです。デモは別に禁止されてもいないのに、できなくなっていた。では、この状態を突破するには、どうすればいいか。そのことを、僕は考えていました。そこで、デモについていろいろ考え発言したのですが、結局、まず自分がデモをやるほかないんですよ。なぜデモをやらないのかというような『評論』を言ってたっしょうがない。それでは、いつまで経っても、デモがはじまらない。デモが起こったことがニュースになること自体、おかしいと思う。だけど、それをおかしいというためには、現に自分がデモに行くしかない、と思った。」

このような「何かしよう」という姿勢は、柄谷をはじめ多くの批評家の共通点であるようだ。最近、私は従来のメディアと新しいメディアの両方を通じ多くの示唆を得たが、そのなかで、私と同じ文脈をもつひとりを紹介したいと思う。社会心理学者のハラルド・ヴェルツァーは、既存の知識を実践的なものにすることを目指す「フューチャーツー futureTwo (FuturZwei)」と呼ばれるプロジェクトを始めた。ヴェルツァーは、(国家社会主義のもとでの日々の生活と、記憶の中の日々の生活に焦点をあて) どのようにファシストの過去は受け入れられるのかという研究で知られている。最近、彼は将来のことを懸念し、気候変動の緊急課題に専念している。ヴェルツァーは、行動や振る舞いの必然性を

知ることが、行動を変えることに繋がるかもしれないとの可能性に対しては懐疑的である。それは、彼が私たちに認めるよう訴える「私たちは以前のような生活を続けることができない、しかし、私たちはおそらく以前のような生活を続けるだろう」という、福島第一原発事故に関する震災直後の挑発的な発言からも明らかである。

持続可能性を目的としたプロジェクトのひとつであり、ドイツの財団が後援している「フューチャーツー」(<http://futzwei.org/>)は、我々は一体何をなせるだろうかとの考えに基づいている。ヴェルツァーにとって、経済成長は資本主義経済のまさに本質である。この二世紀で、資本主義経済は浸透し、制度的な基盤だけではなく精神的な基盤も敷衍した(これは、資本主義経済が、私たちのアイデンティティの概念を形作り、「レーベンスヴェルト」といわれる私たちの生活世界における全ての行為に入り込んでいることを意味する)。この精神的な基盤が、政府や市民社会の教育機関を通じて、また賞賛される美德を植え付けられることによって、そして競争や対抗において個々人のパフォーマンスが常に評価されることを通じて形成されているのである。このことが、炭素に基づく(つまり化石燃料の)社会の有限性が認識されているにもかかわらず、そのために行動し、持続可能で将来性のある生活——すなわち、「成長」を金科玉条とする姿勢に見切りをつけた経済を前提とする——を形成することを困難にしている。もちろん、私たちは(私たちとは誰だろうか? という疑問は残るが)チェルノブイリとそして現在の福島第一原発事故から何を学んだのだろうか、と、冷静に考えることもできる。しかし、知識を実践に変えることは、全く異なる問題なのである——ヴェルツァーは、もし少しでも知識と実践が結び

ついたとするならば、それはゆるく結びついただけだと言う。ヴェルツァーは柄谷のように「土壇場の」知識が実践に繋がらない限り、知識と実践の結びつきについて懐疑的である。

それにもかかわらず、ヴェルツァーによると、「実践に変わる最も強力な瞬間は、実践するその時である。」——つまり、震災による福島第一原発事故のような出来事がその時になる。

何千もの人々の命を奪うような出来事が、今後さらに多くなることが予想される。たとえば、「アラブの春」の引き金となったチュニジアの行商青年モハメッド・ブウアジジ (Mohamed Bouazizi) の自己犠牲のように、何か新しいことを生み出すきっかけとなる出来事の重要性は、社会学者マウリツィオ・ラッツァラートによって次のように述べられている。

「出来事には、条件によって結果の全てが決まるわけではないという意味で、因果関係による社会決定論に矮小化できない何かがある。(中略) したがって、その出来事がどこで起こるのか、そして歴史のどこに新たに刻まれるのかなど、出来事を歴史から完全に推測することはできないのである。」(ラッツァラート 2011)

「(「ノー！」ということも含め) 限界を示すことができない可能性を」生み出しながら、何かが変わりつつある。「(中略) 出来事は、自己変化の可能性と政治、社会的な状況を打破する可能性をもつ。出来事に遭遇した人々には新たな世界が開かれ、新たな関係、思考、新たな行動様式、新しい知識やその影響に関わることができる。」最初は

考えるよりも感じると予想されるこれらの可能性——多くの人々は自分の存在をおびやかすものと考えているけれど——が、言語や新しい推論的な分野、行動と組織化の新たな方法を生み出させる。

「出来事が世界に加わることによって、出来事が欲望と未知の信念の源になる。そして、その出来事はすでにそこにあり、すでに始まっていることを理解しなければならない。出来事とその影響は、世界に何かを与え、既に制度化されているものを変えることができる。政治的な行動は、出来事に含まれる新たな可能性から出発して、何かを変化させるための条件を作り上げる。」(同書)

ここに、**出来事**に伴う社会的、政治的变化に関するラッツァラートの考えとともに、私が福島第一原発事故直後の新たな行動様式として、柄谷とヴェルツァーが示す典型的な「介入」を取り上げる理由がある。福島第一原発事故は、なぜか学術的な考察に役立つような話題とはならなかったが、少なくとも二つの点で考え方の変化を意味し、また変化を必要としている。

## 1 理論的・分析的側面

長い間、戦後の日本は、比較的均質できわめて裕福な中流階級社会を構築したことから、サクセスストーリーとして語られてきた。戦後の日本のアイデンティティは、主に「技術ナショナリズム」とよばれる技術的進歩を伴った「家庭の電化」によって形成された。よく知られているキーワードとして、輝かしい生活を意味する「明るい豊かな生活」、夫婦と未婚の子だけからなる家族を意味する「核家族」がある——私は、最近、家の熱源を全て電気でまかなうことを意味する「オール電化」という言葉のあ

いまいな意味に気付かされた。この戦後の日本にみられる自己意識は、「私たち／日本人」対「世界／西欧」（つまり「内側」対「外側」）という厳しい分類に基づいている。しかしながら、福島第一原発事故以降、この神話は終わりを迎えた。私たちは、特に原子力文化について論じなければならないだろう。エネルギー産業と原子力産業は、これまでの日本学術界の弱点であった。そのため、国家を超え、文化を越えた文脈において明らかにされ、十分に検討される必要がある。

## 2 知識の実践的側面

戦後の歴史において、日本では常に反原発運動が存在した（原子力資料情報室のホームページの反原発人名辞典（“Anti Nuke Who’s Who”）というコラムでは、多くの原発反対派の人々をみることができ）。これまで、彼らは無視や排除、抑圧をうけてきた。しかし、今日、メディア技術の発展のおかげというだけでなく、アラブ世界で生じた抗議活動（いわゆるアラブの春）や西欧で生じた抗議活動（「ウォール街を占拠せよ」）のような世界的な出来事の流れの中で、日本の反原発運動は社会変革に乗りだす強い意志を示す機会となった。

原子力資料情報室についてももう少し触れておきたい。1975年に設立された原子力資料情報室<sup>(4)</sup>は、最終的に安全で核のない世界という目的を実現するために、原子力のあらゆる状況について、信頼できる情報と市民向けの教育（公教育）を提供する非営利団体として活動している（詳細については <http://cnic.jp/english/cnic/index.html> 参照）。しかしながら、3.11以降、そのスタッフと研究者たちは、福島第一原発事故に関する情報を求める何

百という電話やeメールに圧倒させられたのである。信頼できる独立した情報に対しあまりにも多くの要求が寄せられ、原子力資料室の機能が麻痺する恐れがあった（ニコラ・リスクティン 2011「腹を立てよ！「フクシマ」、新しいメディア、日本における反核運動」<sup>(5)</sup> Issue 47 No. 1, November 21, 2011)。

原子力資料情報室は、このような状況に直面し、2010年に日本語版も利用可能となったユーストリーム、インターネットテレビ、Twitter、ブログのような幾つかの新しい双方向メディアとコミュニケーション技術にすぐに可能性を見出した。リスクティンによると、これらのニューメディアは、その利用者もしくは視聴者である日本人と日本人以外の何億もの人々に対して、「原子力に関するある種の集中講義という役割を果たした」のである。また、リスクティンは、「原子力資料情報室は、『素人の乱』もしくは『さよなら原発デモ』のような、日本のトップダウン式の民主主義といった政治情勢の転換を求める運動と比較して、確立された政治過程と政治制度を経由して日本のエネルギー政策の転換を求めている」ということを強調している（Liscutin 2011）。

二つ目の例として、新たな抗議運動、特に松本哉がキーパーソンとなる「素人の乱」（アマチュア達の乱）をみていきたい。

「もちろんデモだけでは社会は変わらないかもしれない。いろんな方法を組み合わせることで社会はよくなっていくと思うんです。……やっぱり、意見がある人たちはちゃんと言ったほうがいいんです。デモはある意味瞬発力の運動だと思うんですよ。……とにかく、意見があったら言う。そう

いう意味でも、デモはどんどん、むやみやたらとやるべきです。どうしようかなーって迷ってるヒマがあったら、一刻も早くやったほうがいい。どんどんやっちゃって、いろんなことは後から考えたらいいんです。」（松本 2011 : 51）

彼らの活動については言うまでもなく、過去一年半の間に現われた全ての反原発集団の数やその質をたどることは容易ではない。「原発やめろデモ!!!!!!」のような反原発運動は、「素人の乱」に限定されるのではなく、同質的な一体感が他の集団まで広がっているのである。しかし、私が「素人の乱」の主唱者たち、特に松本哉（1974 年生まれ）に興味を持ったのは二つの点からである。

まず、最初に震災による原発事故のわずか一ヶ月後に自発的な行動を起こしたのが彼らだったからである。彼らは、「原発やめろ!!!」をスローガンとして、東京の高円寺に人々を集めた。高円寺は、彼らが 2005 年から「ボッタクリ経済」に対抗し、それに代わる生活圏を作った場所である。彼らは、茶化しながら「もう頭に来た！ 原発あぶねえ！ 超巨大反原発 30 万人デモ」の開催を呼びかけた。しかしながら、約一万五千人の人々が高円寺に集った時、彼らは本当に驚いたのである。なぜなら、過去の経験に基づくと、デモ参加者は千人程度だろうと予想していたからである。このデモは、全国的にさらに増加する抗議活動とデモの中心となった。「素人の乱」は他に四つの「原発やめろデモ!!!!!!」を組織している。最初の「デモの波」は、9 月 11 日に新宿で開催され、柄谷行人が「デモをしよう！」とスピーチを行った「原発やめろデモ!!!!!!」において最高潮に達し、二万人以上の人々が集まった。このデモで十二人が逮捕されると、グループは意見の相違

により、反原発デモを活発に組織することから一時的に手をひくことになった。しかし、2012 年 6 月に野田首相（当時）が大飯原発の二基を再稼働すると表明したあと、これに反対する「紫陽花革命」で「素人の乱」は復活したのである。つまり、「素人の乱」は、この時「原発やめろデモ!!!!!!」だけではなく、「野田やめろ」、「野田首相を止めて下さい」と野田首相の退陣を求めるもうひとつのデモ（「原発やめろ野田やめろデモ!!!!!!」）を（7 月に）組織したのである。

（私がこの集団に興味を持った二つ目の理由にもなるのだが）「素人の乱」は、何十年も日本に不在だった路上での抗議活動と呼ば戻し、国民の間に蘇らせた。それは、おそらく、松本とその仲間が、ヨーロッパと日本におけるプレカリアート労働運動（precarariat）<sup>(6)</sup>から、新しい考えに対応しながらも確実なデモ運動にするため、なじみのある運動実践を用いたからだと思われる。言い換えるならば、「素人の乱」は震災や原発事故からの復興というだけではなく、長い間、小さな地域的な 社会運動 としても活発に活動していた、ということである（同時に、その小さな地域的な社会運動は、新しいメディアを経由して「世界」とも繋がっていたけれども）。これまでの日本研究において、オルタナティブなライフスタイルの追求はほとんど顧みられなかった。それは、日本研究の焦点が、いまだに同質的な中流階級とその規範や価値観にあるからである。しかし、「素人の乱」の関係者は、多くの人々、特に若い人々を 3.11 以降のデモに動員し、この政治的な抗議活動を、構造改革を達成するための確かな社会運動へと変えたのである。松本哉、木下ちがや、池上善彦とその他の多くのメンバーが 3.11 から始

まった彼らの活動について話し合う場がもたれた<sup>(7)</sup>。彼らは、いかに集会を組織するのかを伝えるため、他の多くの市民団体から招かれたのである。その結果、「素人の乱」とは、この特定の集団から生じた一つの着想というのではなく、一種の挑戦、すなわち自主的に独立して考え、発言し、行動するための一つの原則となった。

「素人の乱」に関わる人々は誰なのだろうか。東京の高円寺の商店街で、彼らはリサイクルショップ「素人の乱」のほかいくつかの店舗を運営し、インターネットラジオとある種のミニコミ誌も展開している。それは、過剰な消費社会の圧力を避けるためだと言う。松本によると、リサイクル、修理、改造は、モノを消費することでモノに管理される代わりとなるため、ある種の「モノに関する自治」なのである。また、松本は、高齢化や低価格競争によって閉店に追い込まれ、シャッター商店街になろうとしていた商店街の住民たちと自主的な行動とコミュニケーションのための空間を形成した（このようにして、高円寺のこの地域の解体と再建を避けている）。さらに、いわゆる「地下大学」<sup>(8)</sup>が「素人の乱」の店舗で開催され、日本だけではなく世界的な社会不安と社会変化に関する問題にも取り組んでいる。取り上げる問題は、自己実現を認める労働形態の他に、労働者の尊厳と承認も含んでいる。そのため、「素人の乱」は、2004年から「フリーター全般労働組合（PAFF）」<sup>(9)</sup>の「自由と生存のメーデー」<sup>(10)</sup>のデモにも関係している。

2011年10月に、松本とその他のメンバーは、反格差社会デモ「ウォール街を占拠せよ（occupy wall street : OWC）」に参加するためニューヨークへ向かった。「ウォール街を占拠せよ」運動主催の

「Flying seminar」において、この運動の「新しい学校」の参加者と「素人の乱」のメンバーにより、日本とアメリカの社会運動の相違点と類似点についての議論がなされた<sup>(11)</sup>。

私は活動の多くの例を取り上げ、それらの活動が社会に与える新たな意義と展望について分析してきた。つまり、それは、どの方向に向って誰が行動しているのか、彼らにはどんな意図があるのか、どのように他の主導者たちと繋がっているのか、そして、それは日本の地域レベルであるのか、それとも世界的な広がりをもつのかということである。（核兵器または原子力産業のどちらも含む）原子力エネルギーという文脈において、社会運動のネットワーク問題は非常に重要な問題である。なぜならば、2012年2月、ドイツのボンで開催されたシンポジウムにおいて、ドイツ現代思想研究者の三島憲一（現在、東京経済大学教授）が、原子力産業と政治の癒着やそれに関わる利権をめぐる構造を「もたれあいの利害が固まってできたコンクリートの壁」と的確に特徴づけたように、巨大で国家的もしくは国家を超えた権力によって、社会運動や新たな抗議活動は妨害されるからである。また、三島は、（ロベルト・ユンクが1977年に示した）「原子力帝国」、そして、政治家、官僚、産業、学术界、メディアの利害関係で結ばれペンタゴンとも呼ばれる「原子力村」の権力に対抗しうる抗議活動の可能性については、極めて妥当な疑問を示している。しかし、この疑問は、これらの抗議活動を綿密に考察するために重要な視点だと思われる。

## 注

(1) イタリア共産党の書記長を務めたアントニオ・グラムシの言葉。この言葉は、ロマン・ロランから

影響を受けたともいわれており, その著作『獄中ノート』や『獄中書簡』において繰り返されている。

(2) イタリア・ルネッサンス時代に, ボロメオ家の紋章として用いられた。「ボロメオの輪」とも呼ばれる。三つの輪は互いにしっかりと連結しているものの, 二つの輪どうしは連結していないため, どの一つの輪でも欠けると残りの輪はバラバラになってしまう。

(3) 「有機的」知識人の対概念は, 「伝統的」知識人である。グラムシは, 知識人を二つに大別し, 近代以前から存続してきたタイプを「伝統的知識人」, 近代化に伴って登場した知識人を「有機的知識人」と呼んでいる。「伝統的知識人」とは, 「聖職者など, 普通に知識人と考えられている人々, ある社会で知的指導という課題を課す人々」(ジェームス・ジョル『グラムシ』岩波書店, 1978: 126) のことであり, 「近代的知識人」とは「社会に積極的に関与し, 社会と人々の精神構造の根本的変革を目指す活動家」(エドワード・サイード『知識人とは何か』平凡社, 1998) を指す。

(4) 原子力資料室については, <http://cnic.jp/english/cnic/index.html> を参照。

(5) 詳しくは, <http://japanfocus.org/-Nicola-Liscutin/3649> を参照。

(6) precariat とは, 「Precario (不安定な)」(イタリア語) 「(Proletariato (プロレタリアート))」(ドイツ語) を組み合わせた造語。新自由主義経済の市場中心主義, 経済のグローバル化の下で不安定な雇用に従事している人々を意味する。2003年のイタリアで使われ出し, ヨーロッパに広がった用語だといわれている。

(7) 2012年2月に東京外国語大学で開催された「レベッカ・ソルニット来日記念連続企画 世界は変え

られるという予感 3.11/原発人災/〈占拠〉と街頭の公共性」において, 『高円寺「素人の乱」とウォール街を結ぶ』という第1企画にて行われた。

(8) 進行中のイベントについては, 「地下大学」<http://www.chikadaigaku.net/>を参照。

(9) Part-timer, Arbeiter, Freeter & Foreign Workers の略称。

(10) ヨーロッパでは既存の労働組合のメーデーとは別にプレカリアートのメーデーであるユーロメーデーが行われており, 日本でもプレカリアートが中心となったフリーター全般労働組合 (PAFF) が独自に「自由と生存のメーデー」を呼びかけている。

(11) その様子は, <http://www.deliberatelyconsidered.com/2011/10/oct-25-2011-dialogue-with-shiroto-no-ran/>で見ることができる。

## 参考文献

- Azuma, Hiroki (2011) “For a Change, Proud to Be Japanese”. In: New York Times, March 16, 2011  
(<http://www.nytimes.com/2011/03/17/opinion/17azuma.html>)
- Ishibashi Katsuhiko (1997) 「原発震災」『科学』vo..67, 10月, pp. 720-724.
- Jungk, Robert (1977) Der Atomstaat. Vom Fortschritt in die Unmenschlichkeit. München: Wilhelm Heyne Verlag.
- Karatani Kōjin 柄谷行人 (2006) 「世界共和国へー資本=ネーション=国家を超えて」. Tōkyō: Iwanami shinsho.
- Karatani Kōjin 柄谷行人 (2011a) 「反原発デモが日本を変える」In:



- <http://www.kojinkaratani.com/jp/essay/post-64.html>
- Karatani Kōjin 柄谷行人 (2011b) 「国家と放射能」『at プラス・思想と活動』9号, pp. 16 - 19.
- Karatani Kōjin 柄谷行人 (2012) 「人がデモをする社会」『世界』9月号
- Lazarato, Mauricio (2011) “The dynamics of the political event. Process of subjectivation and micropolitics” . In: <http://eipcp.net/transversal/0811/lazarato/en>
- Liscutin, Nicola (2011) “Indignez-Vous! ‘Fukushima,’ New Media and Anti-Nuclear Activism in Japan” . In: The Asia-Pacific Journal Vol 9, Issue 47 No 1, November 21, 2011 <http://japanfocus.org/-Nicola-Liscutin/3649>
- Matsumoto Hajime 松本哉 (2011) 『むやみやたらとデモをやるべきです』 In: TwitNoNukes 編著: 「デモいこ！ 声を上げれば世界が変わる。街を歩けば社会が見える」 Tōkyō: Kawade shobō shinsha, pp. 50/51.
- Matsumoto 松本哉 et al. (2012) 『高円寺「素人の乱」とウォール街を結ぶ：記録』 In: Quadrante -Areas Cultures and Positions, Vol. 14, March. The Institute of Foreign Affairs, Tokyo University of Foreign Studies, S. 9-33
- Miyadai Shinji 宮台真司 (2011) 「脱原発が陥りがちな罠にご注意！」 (21. 07. 2011, see <http://www.miyadai.com/index.php?itemid=947>) .
- Welzer, Harald (2011) “Nach Fukushima. Warum wir so wie bisher nicht mehr weitermachen können-und vermutlich genauso weitermachen werden “. In: Kulturpolitische Mitteilungen, Nr. 132, I/2011, S. 20 (<http://www.adz-netzwerk.de/Nach-Fukushima.php>)
- Steffi Richter (ライプチヒ大学／日本学)